

# 公益の風 #58



東北公益文科大学大学院 公益学研究科 修了生

東 山 昭 子

重たい雪に耐えて芽吹き始めた水仙やチュウリップの鋭い葉先には、冬の厳しさを知る者のみが持つ喜びと、反骨の気概にも似た伸び行く生命の芯の強さを感じられる。次の時代を拓く力を信じ、ひたすらに熱い願いを叶える努力をした者のみを知る春である。

令和4年4月、コロナパンデミックが内外社会を揺るがす中での入学であった。希望と期待を以て入学した学生は、校舎内に立ち入ることも出来ない大学

## 地域共創の新たな門出

もあり、講師として関わっていた大学でも、マスクは勿論オンライン講座となったり、透明パネルを立てたり、教室に学生が居るだけでも安堵する状況であった。ましてや経営を担当する理事長や学長諸氏の苦悩はどれほどの深さであったか計り知れない。大学院も志望者が激減した。潰しては居られないみだいな私的な思い入れで入学を希望した。それでも85歳での入学となれば、まずはパソコン操作が自由にならないことは認識していたので、履修期間延長は入学許可を受けると同時に申請した。思いがけない金野信勇理事長補佐の逝去はショックだった。陽だまりのよくな温かさ、厳しく人を育てる包容力無限の方であった。

見ず知らずの庄内に大学卒業の春に着任したのは鶴岡北高校であった。20坪の教室に58人が学ぶ女性だけの空間に圧倒されながらも、しかし生徒たちは皆明るくそれぞれに個性的であった。この子たちに幸せであってほしいが願いとなった。女子教育の可否から問い直しが始まった。中

国革命の女性解放の指導者は宋慶齡氏であった。宋氏に関わるレポートを書いた時、担当の印刷所社長は「先生、字が間違っていたから直しておいてやったらからな」と言った。宋氏の掲げたスローガンは「女性は天の半分を支える」であったが、「天」は「夫」に訂正されてあった。それ以来、朝、新聞を開く度に「先ずは掲載されている各種会合の写真にどれだけ女性の姿があるか確認する癖がついた。諸種の委員会に出席しても女ひとりの会議が多かった。女で初めての役職も多かった。現実には女性が共に在る会議は活気があり、多様性があり、生活に密着した自分事としての捉え方から発想する活動が多い。大学院ではこれらを踏まえ、女性の活動の場の捉え方に客観性があるのか、独りよがりの思い込みかを歴史的に検証してみようと考えた。論文テーマになり得るか、指導して下さる先生がおいでなのかも全然考えない入学であった。幕藩体制から近代国家への転換期を城下町の女性たちは、どのような生き方をしたのかを文献的に検証した。

デジタル機器は不慣れ、テーマ性未定の出発に先ず門松秀樹教授を指導教官に選任して下さったことに感謝している。必須科目習得にもアドバイスを頂き、学術論文など書いたこともなく過ごしてきた者に、データの取り扱い方や論文の形式を教授し、遅刻なされることもなく関連する歴史を語り、正反両面の多面的な捉え方を語り、鵜呑みにすることのない批判的な読みを深めて頂いた。パソコン操作には若い学友たちがさりげなく手を貸してくれた。事務室を最大に煩わした学生であったが遅滞することはなかった。面倒見の良い、やる気のある学生を最後まで育成する教職員諸氏であった。

公益文科大学は一時、入学希望者の低迷で存立が危ぶまれた。危機的経営の立て直しを委嘱されたとされる新田嘉一理事長と故町田春学長の命がけの大改革で再生し「選ばれた大学」になった。冬来たりなば春遠からじで、その立場に立つ人の愛郷の想いの深さで新しい門出を迎える。人材育成による地域共創の情熱が呼び込んだ北国の春と感謝している。